

The Council of College English Teachers

全国高等専門学校英語教育学会

第34回研究大会プログラム

主催： 全国高等専門学校英語教育学会（COCET）
 期日： 平成22年9月17日（金）～19日（日）
 会場： 札幌市教育文化会館
 〒060-0001 札幌市中央区北1条西13丁目
 TEL.011 (271) 5821
 参加費： COCET 会員は無料（非会員 2,000 円）

1. 日程

◆ 第1日 9月17日(金) 15:00～17:00 理事会(304号室)

◆ 第2日 9月18日(土)

10:00 └ 12:00	12:00 └	13:00 └ 13:35	13:40 └ 15:00	15:00 └ 15:20	15:30 └ 17:45	18:30 └			
情報 交 換 会	受 付	総 会	特 別 講 演	写 真 撮 影	研究発表 I				懇 親 会
					[1]	[4]	[7]	[10]	
					[2]	[5]	[8]	[11]	
				[3]	[6]	[9]	[12]		
賛助会員展示(302号室)									

◆ 第3日 9月19日(日)

9:30 └ 12:20					12:20 └ 13:30	13:30 └ 15:00			15:00 └ 15:10	15:30 └ 17:00	
研究発表 II					昼 休 み	フ ォ ー ラ ム			閉 会 行 事	C O C E T サ ロ ン	
[13]	[16]	[19]	[22]								
[14]	[17]	[20]	[23]	[25]							
[15]	[18]	[21]	[24]	[26]	賛助会員展示(302号室)						

2. 情報交換会（305号室）

- ・司会：森岡 隆（和歌山高専） 青山晶子（石川高専）
- ・テーマ：『授業・研究のための tips 』

「研究」として発表するほどではなくても、日頃の授業や研究の中で思いついたアイデアや、ちょっとした小道具、知っておくと役に立つ情報などをお持ちの方は多いと思います。この会では、そのような情報を tips として紹介します。
 飛び入り歓迎。

3. 特別講演 (305 号室)

- ・講師：園田 勝英 先生 (北海道大学メディア・コミュニケーション研究院教授)
- ・演題：英語教育における語彙学習－語彙表と機械可読版辞書－学生の意欲を引き出す授業作りの視点

講演要旨

コーパスを用いた研究によって、英語学習者が習得すべき語彙的知識の総体を精密に同定することが可能になってきた。これは、一方では、JACET や COCET などの教育語彙表の信頼性が増していること。また他方、LDOCE に代表されるコーパスを駆使して編纂される英語辞書の機械可読版を、語彙的知識のデータベースとして活用できるようになってきたことによるものである。このようにして学習者が記憶すべき語彙的知識が明確になると、語彙学習が英語教育全体で占める割合や位置が明確になる。また、語彙学習を効率的かつ効果的に行うための工夫が可能になる。

4. 研究発表 I

	303号室	304号室	305号室
15:30~16:00	[1] <u>海上順代 (都立産技)</u> “Was” – Go Down, Moses に 於ける重要性と再評価 司会：森岡 隆 (和歌山)	[2] <u>Simon Humphries (近大)</u> The challenges of communicative pedagogy in kosens 司会：青山晶子 (石川)	[3] <u>荒木英彦 (木更津)</u> 発音・フォニックス指導を取り 入れた語彙指導の試み 司会：能登路純子 (沼津)
16:05~16:35	[4] <u>発表辞退</u>	[5] <u>John C. Herbert (明石)</u> 、 <u>Gordon Bateson (金沢学院 大)</u> 、 <u>井上英俊 (明石)</u> Mobilizing Moodle for TOEIC Preparation 司会：青山晶子 (石川)	[6] <u>久保田佳克・朴権英 (仙台)</u> オール・イングリッシュの授 業と学習意欲の変化 司会：能登路純子 (沼津)
16:40~17:10	[7] <u>土屋知洋 (岐阜)</u> 英語学の知見を英語教育へ： 補文標識 that の省略制限と学 校文法の実態 司会：神谷昌明 (豊田)	[8] <u>青山晶子 (石川)・立野彰・ 高越義一 (富山)</u> プリント感覚で作成できる英 語コンピュータ教材 CALIS を使った授業 司会：武田 淳 (仙台)	[9] <u>竹内春樹 (近大)</u> リスニン グ活動を重視した英文理解教 育 司会：荒木英彦 (木更津)
17:15~17:45	[10] <u>鈴木 栄 (小山)</u> metaphor に現れた学習観 (ビ リーフ) 司会：神谷昌明 (豊田)	[11] <u>南 優次 (宇部)</u> 宇部高専での海外インターン シッププログラム構築につい て 司会：武田 淳 (仙台)	[12] <u>林 浩士 (鈴鹿)</u> デザイン能力向上を意識した 高専英語科授業実線に関する 一考察 司会：荒木英彦 (木更津)

5. 懇親会 (ロイトン札幌 20F パールホールAB)

札幌市中央区北1条西11-1 TEL: 011-271-2711

研究発表 I の発表要旨

-
- [1] “Was”は、Isaac が McCaslin 家の人種混交の歴史を検証するプロットに至る前の物語であり、Go Down, Moses の中で特別重要性が高いとは見なされてこなかった。“Was”は Go Down, Moses で中心となる“The Bear”と視点や時代設定で連続性がなく、作品全体の導入部として理解されるにとどまっていたと思われる。批評史をみると近年“Was”の再評価の傾向が認められるが、本発表ではその傾向も踏まえつつ“Was”が Go Down, Moses の最初の物語として作品全体に与える効果について検討し再評価したい。
-
- [2] University English entrance test (jyuku) washback is often blamed as an obstacle to CLT in Japanese high schools (Kikuchi, 2006; Watanabe, 2004). However, technical college (kosen) students can study for five years and then transfer to a university without an English test through the recommendation system (henyu suisen). To maximise the opportunity from this latter situation, the presenter’s college partially implemented CLT textbooks. Following several exploratory interviews and classroom observations, this presentation describes the challenges faced by four kosen English teachers who experienced the curricular change. Members of the audience will also be welcomed to share their own CLT challenges.
-
- [3] 新たな語彙を習得させるために、毎授業の初めに英単語の小テストを行っている。しかし単語が覚えられなかったり、スペルミスをする学生がいる。また、英単語を読ませると読めない(発音できない)学生も多い。使用している教科書は、巻末に新たな語彙のリストがまとめられているが、発音表記がなく、また読み方が難しい単語も多い。そこで語彙指導時に、あわせて簡単な発音やフォニックスの指導を取り入れてみた。今回はその指導内容と指導方法について発表する。
-
- [4] 発表辞退
-
- [5] This demonstration reveals how Moodle can be used to create online TOEIC preparation materials for students. The focus of the presentation will be on the use of the QuizPort and TaskChain modules of Moodle with a particular emphasis on the development and use of the ANCT-Scan plug-in in relation to those two modules. Then, an explanation will be provided on what has been done and will be done to make ANCT-Scan and its parent modules more iPod Touch, Nintendo DSi-LL, and Sony PSP-friendly.
-
- [6] 新学習指導要領では高校の英語の「授業は英語で行うことを基本とする」とされている。高専の低学年で一年間を通して、オールイングリッシュで授業を行った場合、学生たちの英語に対する意欲はどのように変化するかを、簡単なアンケートを通して探ってみた。2人の教員が、検定教科書を用いて、それぞれの担当クラスで別々のやり方で授業を行ったところ、結果に違いが見られた。今回の発表では、アンケートの結果から、授業方法と学習意欲の変化にどのような関係が見られるのかを探りたい。
-
- [7] 本発表の眼目は、英語学の研究成果が、間接・直接的に英語教育の内容の見直しへ結びつけられることを提案することである。例えば、ク라운総合英語(三省堂)など主要な文法書の接続詞の項目には、I believe that you will succeed as an actor.のような用例を挙げ、that 節を目的語にする場合、頻繁に that の省略が起こるとしている。しかし、この記述は They demanded that he (should) tell them the truth.の that も同様に省略できるとの誤解を招きかねない。本発表の議論から、補文標識 that の省略には動詞の意味が密接に関係していることを、そして適切な that 省略の制限を提示したい。
-
- [8] e-learning 教材は、有効な個別学習支援ツールであるが、学生の多様化がますます進む中、開発と改変に時間とコストがかかりすぎる市販教材だけでは、様々なニーズに対応できなくなっている。本発表では、MS-Word で文書が作成できるレベルのデジタルリテラシーがあれば、誰にでも簡単に e-learning 教材が作れるオーサリングシステム CALIS の機能と、授業における実践例を紹介する。
-
- [9] 高専の学生へのアンケート調査の結果では、リスニング能力の改善を希望するものが多かった。そのため、通常の授業での英会話指導に加え、リスニング活動重視の時事的長文の理解教育を行なった。授業手順は、まずテキストの CD を学生に聞かせ、テーマ把握と特定項目の理解を英語の質疑応答で図った。次にテキストを配布し、空所の聞き取りを行なわせた。その後、単語説明、各文の説明、全体構造の説明を行なった。今回の発表では、学生へのアンケート結果を分析し、英語学習への期待とこの授業法の効果を検証する。
-
- [10] 学習者が持っている belief を知ることは、カリキュラム編成や授業改善において必要である。質問紙(BALLI)を使った研究では、belief の構築および変化 が探れないため、alternative study がおこなわれてきている。今回は、

その試みとして、英語学習に関して高専の学生が持っているビリーフを **metaphor** を通して探った。そして、学生のビリーフを授業にどのように活かすことができるかを考察した。

[11] 宇部高専では、平成 19,20,21 年度現代 GP「東北アジア地区交流による実践的技術者の育成」プログラムに取り組み、韓国、中国、ロシアの大学と学術協定を結んだ。その協力関係の中で、英語によるプレゼンテーションを含む海外インターンシップを希望する本校専攻科生が事前準備を含む 90 時間のプログラムを遂行し、本校所定の単位を取得した。今回の札幌大会では、よりよいプログラム構築・運用の継続実践をテーマとする議論を、学会員と始めることを目的とする。

[12] 今多くの工業高等専門学校、特に JABEE 受審校においては、それぞれの教育プログラムの中にエンジニアリング・デザイン能力(デザイン能力)向上の手立てを盛り込むことが求められている。鈴鹿高専では第4学年の「創造工学」を中心にこれを具体化しようとしているが、コミュニケーションおよびチームワークにつながる能力向上の側面から、語学授業においてこの取り組みをバックアップする方策について考察する。

6. 研究発表 II

	303号室	304号室	305号室
9:30~10:00	[13] <u>吉田三郎、小寺光雄(福井)</u> Effects of Short-term Overseas Study Program on the Students' English Proficiency 司会：中井洋生(鈴鹿)	[14] <u>畠山喜彦(一関)</u> "高校生と高専生の英語学習に対する意識と取り組み－第3学年における比較を通して－ 司会：穴井孝義(大分)	[15] <u>中川右也(米子)、土屋知洋(岐阜)</u> 学習英和辞典を有効活用するために：電子辞書と紙の辞書の比較研究 司会：中井大造(米子)
10:05~10:35	[16] <u>森 和憲(香川)</u> プレゼンテーションソフトを利用した英語文法ビデオ教材の開発とその問題点 司会：中井洋生(鈴鹿)	[17] <u>渡辺真一(北九州)</u> 高専と高校の違いとは－新米高専教員の視点から－ 司会：穴井孝義(大分)	[18] <u>高橋薫、神谷昌明(豊田)</u> 文法概念定着を目指しての試み－絵解き英文法－ 司会：中井大造(米子)
10:40~11:10	[19] <u>望月 肇(弓削商船)</u> 弓削商船高等専門学校専攻科英語キャンプ2009の実践－夏期集中・少人数形式で英語運用能力向上を目指して－ 司会：森 和憲(香川)	[20] <u>白田悦之(函館)</u> Blended learning を考える－何をどうブレンドすべきか－ 司会：西野達雄(大阪府立)	[21] <u>奥山慶洋、長野眞康(茨城)</u> 英語で書かれた専門教科書の語彙分析・・・高専生に必要な専門語彙力を高めるために 司会：小野真嗣(苫小牧)
11:15~11:45	[22] <u>占部昌蔵、大湊桂宏、田中真由美(長岡)</u> 長岡高専学生海外派遣の成果－期待していた成果と予想外の成果 司会：森 和憲(香川)	[23] <u>中井大造、中川右也(米子)</u> 高専における新入生の学力調査～ゆとり教育を受けた学生を迎えるにあたって～ 司会：西野達雄(大阪府立)	[24] <u>高橋愛、国重徹、原田徳彦(徳山)</u> 徳山高専生の英語学習意欲の分析－よりよい動機付けを求めて－ 司会：小野真嗣(苫小牧)
11:50~12:20		[25] <u>山下純一(函館)</u> 函館高専における新入生の文法知識について 司会：竹田恒美(東京)	[26] <u>阿部恵、太田徹(八戸)</u> 英語少人数制ゼミの導入 司会：小野真嗣(苫小牧)

研究発表Ⅱの発表要旨

- [13] After attending short-term overseas study programs, almost all students say they have improved their English. However, their improvement is evaluated mostly in terms of their motivation rather than of their actual English Proficiency. This study shows, by comparing the CASEC test data taken before and after the overseas program, what kind of skills the students actually improved during their stay in an English-speaking country. Although they stayed in the country only for two weeks, they made significant progress especially in their listening skills. This study also gives some hints for a better preparation for the next short-term program that is to be held next year.
-
- [14] 英語を指導する際、学習者の英語学習に対する意識や取り組みについて知ることは重要である。高専において指導をしていると、普通科の高校生との違いに驚くことが多い。効果的な指導を考える際、高校生と高専生の特徴や差異を理解することが重要と考える。高校生と高専生の英語及び英語学習に対する意識や取り組みについて調査し、それぞれの傾向・差異・習熟度による差を分析することを通して、高専における英語指導を向上させるための示唆を得たい。
-
- [15] 本発表では、学習英和辞典を英語学習においてより有効活用するため、高専生の電子辞書と伝統的な紙の辞書の使用実態を調査した結果報告をし、適切な辞書指導を提案する。特に、先行研究に見られる語義調べの速さや記憶の定着度といった表面的な調査ではなく、多義語を正確に引けているのか、また用例や派生語の確認などといった総合的な辞書の機能を調査の際に考慮した。事後テストにより定着度の確認も行ったが、本調査全体を通して、電子辞書と紙の辞書がどの分野で学習者により有効に働くのかを提案できると考える。
-
- [16] 低学力の学生を救うためには、補習等を実施し、一人一人のニーズに即した指導が必要である。そこで筆者は、英語の文法説明をビデオで解説する補習教材を、インターネットで配信するシステムを構築中である。当システムを利用することにより、学習者は場所や時間の制約を受けずに補習を受けることが出来る。本発表では、システムの構築方法を説明し、そこで浮かび上がる問題点を議論する。
-
- [17] 本年4月に高専に赴任してからしばらくは、それまで20年間勤めた大分県立高校とのあまりの違いに驚嘆することの連続であった。施設設備、生徒の学習環境、行事、勤務——この数カ月間で数多くの違いに気付かされたが、その違いには高専と高校それぞれの特徴がよく反映されており、中には双方を改善するための手掛かりが隠されているものもあると感じた。本発表では私個人の考察にフロアの方々のご意見を加え、高専および高校のさらなる発展につながる示唆を得たいと考えている。
-
- [18] 高専の高学年の学生が産出する英語文章を見て愕然とすることがある。低学年で習得したはずの文法概念が定着するどころか、喪失とも言える状況の学生を目にする。そこで、低学年の文法授業のあり方を見直すという観点で、イメージが文法概念構築の支援になるのでは、という発想のもと、これまで取り組んできた「絵解き英文法」なる一風変わった授業を最近制作した公開講座用番組を中心に紹介する。
-
- [19] 本教育実践は、専攻科の少人数クラスの特徴を生かし、専攻科生の英語運用能力と英語学習へのやる気を高めることを目的としている。2009年7月27日～7月31日の5日間、TOEIC対策授業、少人数英会話授業、英語プレゼンテーション準備・発表会、バーベキュー懇親会、合計21時間にわたる英語教育を実施した。本教育実践の事前と事後に、項目応答理論に基づく英語能力判定テスト((財)英語検定協会主催)を実施したところ、事後において、受講生全員の総得点が向上し、読解力、聴解力についても有意に向上した。また事後アンケート結果より、受講生全員の英語学習意欲が向上した。
-
- [20] 英語学習におけるICTを活用したBlended learningについて考える。ここで言うICTはCALLシステム、視聴覚機器、ネットワークなどを指す。CALLとeラーニングを導入する際にどのようなことに気をつけるべきかを検討し、eラーニングと普通教室での対面授業とのブレンド、また、CALL教室での様々な授業スタイルを模索する。発表では、2009年度末に本校に導入されたCALLシステムを現在どのように使っているかを報告し、使用している学生の反応を考察しながら問題点を探っていききたい。
-
- [21] 本発表では、高専生に必要な英語専門語彙力を高めるための方策として、英語で書かれた専門教科書の語彙分析を行い、身につけさせるべき語彙の抽出をすることを目的とする。分析対象とする教科書は、英語圏で開発された高校生・大学初級者向け(高専生の学齢に相当)の数学、物理学、化学、生物学および専門科目の基礎的な内容を扱うものであり、頻出語・学生に指導すべき語彙を抽出する。分析結果については当日報告する。
-

[22] 近年、いくつかの高専において、海外（語学）研修の報告がされてきている。本校の学生海外派遣は国際交流センターの一事業であり、昨年度は、その行き先にオーストラリアも選ばれた。派遣先が英語を話す国ということもあって、英語科教員も事前指導、引率、事後指導に携わった。本発表は、語学研修を主体とするこの派遣に参加した学生への成果を英語科教員の観点から分析した結果を報告するものである。

[23] 今年度からゆとり教育を受けた学生が高専に入学する。この学生達を受け入れるにあたって、教員側は様々な形式での学習支援等に今後対応する必要性が生じるであろう。本発表では、それに先立ち、特に文法項目に焦点を当て、中学校学習指導要領に基づいた学力調査を実施することで、中学校での文法事項習得状況を明らかにしたい。また、その結果と学生達の苦手意識との相関関係を分析し、今後の英語教育における指導方法の一助となるデータを示す。

[24] 高専生の英語力は低いと言われて久しいが、徳山高専も例外ではない。その英語力の低さの最大の原因は、学生の英語学習意欲の低さである。逆に言えば、英語学習意欲をうまく高めることが彼らの英語力を伸ばすカギとなる。そこで本研究では、まず徳山高専生の英語学習意欲が在学中にどのように変化しているか、及び、彼らの意欲が下がる原因は何かをアンケート調査に基づいて分析し、学生を英語学習に向けてよりよく動機付けするために、いつ、どのような対策を講じるべきかを提案する。

[25] 本研究は、高専の新生にアンケート調査を行い、高専入学時点でどのような文法知識を持っており、どの程度、高校文法の学習をする準備が整っているかを調査することを目的としている。その結果を基に、中学校・高専連携という視点も含め、受け入れ側が文法指導を始める際に、どのような準備が必要なのか、どのような配慮が必要なのかを探っていく。

[26] 本発表では、新1年生が中学校から高専へのトランジショナル・ペリオドに英語学習を通じて(1) 自学自習の習慣を身につける、(2) 疑問や意見を自発的に述べることができる、(3) 教員と勉強などについて率直に話し合うことができるなどを目的とした英語少人数制ゼミを導入した結果を報告するとともに低学年生でのゼミ導入を提案する。授業は4～6人を1グループとして、英語担当教員と英語担当以外の教員が指導した。学生の自己学習報告書からゼミでの学習経験が、英語学習および他科目への学習にどのようなメリットがあるのかを提案できると考える。

7. フォーラム(305 号室)

- ・ 司 会：崎山 強（都城高専） 亀山太一（岐阜高専）
- ・ テーマ：“Paper or Electronic? That’s the problem.”

英語学習の「神器」である『辞書（指導）』について討論します。辞書なしで英語を勉強することは、武器を持たずに戦場へ行くのと同じこと。今や、この「武器」にもハイテクの波が押し寄せていますが、このハイテク武器は本当に威力があるのでしょうか？ 電子辞書が急速に普及する中、高専生が使うべきは「紙」か「電子」か？ 今回のフォーラムでは、この辞書のハード、ソフトの両面からアプローチを試みます。

8. COCET サロン(304 号室)

大会を振り返りながら、「もっと言いたい」「もっと聞きたい」という会員のために、インフォーマルな雰囲気でのディスカッション、情報交換の場を設けました。個人で、あるいはグループで、自由に語り合しましょう。

9. 賛助会員展示(302 号室)

2日間を通して、賛助会員各社様の教材、書籍等の展示を行っています。
大会中、一度は足を運んでみてください。